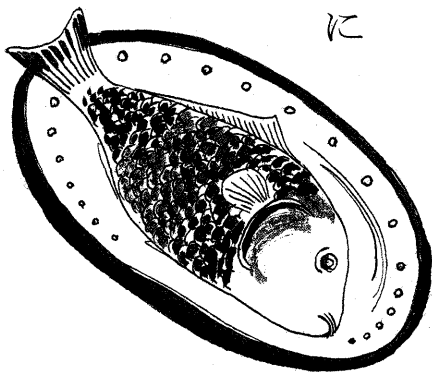


# 「食べる」楽しみ・喜びを子ども達に

上坂元 絵里



三歳児のはじめてのおべんとうの日は、登園した途端に、「お腹が空いちやった。」「もう、お弁当?」と矢の催促で、しまいには勝手にバスケットを持ち出してお弁当のふたをあけていたりということもしばしばである。

「この子は、ほんとうに食べることに執着がないんです。」とお母様がなげいていたA子ちゃんが「どうしてお弁当ってこんななおいしいのかしらねえ。」と隣りの子どもに語りかけるほほえましい光景を目にしたこともある。

私のクラスでは、お弁当は絶対に残さないという約束はない。できるだけ食べ物を大切に食して欲しいという思いを懸命に伝える努力はするが、食べることが負担に感じられるようになって欲しくないと思うからだ。

それでも、C男がおかずの一つを友だちにあげて「これは僕が食べたことにするから、お母さんにB君にあげたって言わないでね。」と話すのを耳にして考

えさせられたこともある。「全部きれいに食べられて偉かったわね。」という母の賞賛を得たいがためだったと思うが、母とも話し合い、本人に残してもいいこと、あるいはお友だちにあげたことを母に話すようにと伝えた。

幼稚園のおべんとうという場面から見てもよく食べる子と、食べさせるのに手のかかる子との個人差はとても大きい。母親にとって、何でもよく食べてくれる子と、工夫して調理しても余り食べない子と、苦勞が随分違うことだろうと感じる。食べる力は、生活全般あるいは知的な面での吸収力と比例するように言われることがある。確かに外への興味をたくさん持ちいろいろな学んでいく力は、食べる力ともあらわれるように思う。そこで、幼稚園でなかなかおべんとうを残さずに食べられない子どもは、生活の中で充分に自分を發揮できていないのかと悩むこともある。しかし、逆の見方をするならば、子どもがのびやかにそしていきいきと生活しているのなら、その子が食べ

ているものが今は充分でありふざわしいと考えられるかもしれない。飽食の時代に生きてみると、日に三度豊かな食事をとることが標準のように考えてしまいがちだが、食べすぎることは、他の物をとり込む力を残さないことにつながるのかもしれない。

幼稚園の生活にもだいふ慣れてきた二学期のある日、おべんとうにしようと思う時刻に保育室には三枚のござが敷かれ大きな家ができていた。どうしても片付けたくないというT君、それでは今日は皆でおへやのござの上でお弁当を食べましょうと提案してみる。木床の上にござでは、あまり座り心地はよくないが、子ども達は大いにはしゃいで支度をした。いただきますすの時にふと思いついて「さあ、今日は森の中へピクニックに来ました。それでは、いただきます。」とお弁当を食べ始める。「あら、リスさんがきたわ。」と私が言うと、ふだん妙に大人びたことを言うC男やS子が「あっ熊もきた。」「小鳥さんも飛んでる。」などと思いがけずのってきた。いすに腰かけて食べる時より

も、皆で一諸に食べる感じがしてとても楽しいお弁当だった。

二月の終わりの、まだ戸外でお弁当を食べるには少し寒い日にもごさを敷いて食べたことがある。その時は電車大好きのお君の思いついた新幹線の食堂車ということだった。

## 昆虫と食物

小島 賢司

昆虫の仲間には世界中に一〇〇万種類以上いるといわれており、動物全体の種類数の八〇%近くを占めています。その個体数となると天文学的な数字になります。まい、とても数えることなどできません。地球はま

食することは、人生の大きな部分を占める。そして食べる力は生きる力であるとも言えよう。食べることを大切に、楽しみ、喜びや満足を得られる子ども達でいて欲しいと思います。そのことは人生をそのように生きられる事にもつながると思うから。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)

